

うちのモノ語り

国特別史跡・旧閑谷学校(備前市閑谷)から県道を北に進むと、左手にユニークな木造建築が現れる。屋根付きの長い建物で、壁はなく、幾重にも重なった古材と白い塊が幾何学模様を描く。

建物は、山陽クレール工業(同市吉永町南方)の本社工場にある「乾燥棚」。3階建ての大小4棟で、1945(55年)ごろに造られた。最大の棟は幅18m、



279 乾燥棚 山陽クレール工業(備前市吉永町南方)



山陽クレール工業本社工場の乾燥棚。風が通り抜け、湿ったクレールを自然乾燥させる

木組み建築 通気性抜群

山陽クレール工業は1940年、瀧本社長の妻の祖父が創業。資本金4500万円。売上高2億6000万円(2017年3月期)。従業員12人。高品質なクレ

メモ

ールの生産や後継者育成の取り組みが評価され、17年3月に経済産業省の「はばたく中小企業・小規模事業者300社」に選ばれた。

長さ130mに及ぶ。「偶然通り掛かった東京大の建築の教授が何の建物かと尋ねたり、文化庁の職員が調査に来たりしたこともある」と瀧本弘治社長(62)が語る。乾燥棚は、自社製品のクレールを乾かすための施設。クレールは、ろつ石と呼ばれる鉱物を砕いた白い粉末で、強度や粘着性を高めるために紙や塗料に混ぜられる。備前市はろつ石の産地で明治期以降、クレールの製造が盛んになった。本社工場では、水を張ったくぼみで石臼を回転させて、ろつ石を砕く。湿ったクレールを乾かす場所が乾燥棚というわけだ。

全4棟のうち、現役は3棟。各棟各階に10段の棚があり、クレールの塊をびっしり並べて自然乾燥させる。1〜2カ月かけ、水分量を30%から1%以下に落として出荷する。建物の中は風が通り抜け、夏場は気化熱で涼しくなる。「いわば水冷式のクーラー。創業者はよくここで昼寝していたらしい。台風も同様に吹き抜けるため、大きな被害を受けたことはない」。備前市一帯では50年代、約30社がクレールを生産していたが、安価な輸入物に押され、今は4社に減少した。乾燥棚を使っているのは2社だけだ。火力で乾燥させる方が効率的だが、「自然乾燥は白さが際立つ。環境にも優しい」と昔ながらのやり方を貫く。価格交渉中の顧客が手間のかかる生産現場を見て納得し、取引拡大につながった例もあるという。「乾燥棚はうちの製品に欠かせない。まだまだ頑張ってもらわないと」。ときどき木組みのずれを直したり、床を張り替えたりして、大事に使

い続けるつもりだ。

(森元俊一朗)

＝随時掲載